

『SBCテレビ視聴通信』1971年12月（SBC信越放送と推定）

「テレビ利用に関する研究会」での講演より

子どもの能力をどう育てるか

能力開発工学センター所長

矢 口 新

教育とは

皆さんは“教育”ということばをお聞きになって、
どういうことを頭にえがかれるだろうか。

“教育”と言えは教師がおり、教師の話を書く生徒がおり、教師と生徒の間には教科書があり、それによって知識が与えられ、子どもの能力が伸びるとお考えだろう。だから、“子どもの能力をどう伸ばすか”という今日の題目は、“教育をすれば子どもの能力は伸びるのだ”ということになり、別にそれに問題はなさそうだが、それにもかかわらず、子どもの能力をどう伸ばすかということが問題になってきたのは、“どう教育するか”“教育のしかたをどうくふうするか”ということと、“子どもの能力をどう伸ばすか”ということとは同じことであるかどうか、こういうところにも問題はあるようにも思う。

今日は、そういうことを考えてみたい。

皆さんが、“こういう形で教育ができる”あるいは“子どもの能力が伸びる”と考えておられることに、そろそろ疑問をもって考え直してみたいほうがよいのではないかという気がする。

この間、ある学校のPTAの方が、「このごろ学校では子どもに道徳教育をしていない」と言う。どういうことか聞いてみると、家にお客さんがきてもお辞儀をしなくて突っ立っている。学校ではお辞儀を

することも教えないと言う。そこで私は、「あなたがその場で教え、お辞儀をさせたらいいじゃないか」と言ったら、「そんなことは学校で教えるのがあたり前だ」と言う。

その考え方は、私は非常におかしいと思う。というのは、学校で、「お客さんが来たらお辞儀をするんだよ」と教えたら、お辞儀が出来るものかどうか。それはことばで教えたって出来るものではないからだ。お客さんが来たときに、お客さんの顔を見て、いつ、どんなタイミングで、どんなふうにお辞儀をするのかをやってみなければ、ほんとうのお辞儀は出来ない。

ということは、お辞儀のことだけでなく、学校では教えられないことがたくさんあるのだ、ということである。家庭で教えなければならないこと、学校以外で教えなければならないことがたくさんあり、それを教えるには、いままでの教育の形ではだめなのだということを、よく考えていただきたい。今こそ、それを改めて考え直さなければならない時代が来ている。

われわれはここ100年の間、知識、知識、知識を与えるということで、学校が先頭に立ってやって来た。それ以外に教育はないかの如く考えてきた。だから教育がだんだん硬直して、にっちもさっちも

いなくなってきたというのが、現在の教育の姿だと私は考える。子どもに知識を与えるよりも、もっと実際にできることをやらせるように考える時代ではないだろうか。

いまだこの家庭へ行っても、おかあさん方は教育熱心で、子どもが帰ってくると「さあ復習して！」と言う。子どもが「何かお手伝いしようか」と言っても、「いいから勉強しなさい」と言う。子どもは仕方がないので二階へ上がってまんがの本を読んでいる。それでも、後ろから見ると勉強しているようだからと、親は安心している。それは知識、知識の教育だからである。知識というのは、教科書に書いてあろうがなかろうが、要するにことばにすぎない。そんなものをいくら頭に入れても、大したことが出来るようにはならない。

昔、私も教科書の編集をしていたことがあるから、そこにどういうことが書いてあるかよく知っているが、「先生、こんなことを書いたら検定に通らないから、こう直してください」なんて言われることもあって、こんな教科書で勉強させられて、ほんとうにかわいそうに、と思いながら書いた。考えてみれば私も罪作りをしたものだと思う。

昔、私のむすこが小学生のころ、おやじをためしやろうと教科書を持ってきて、「中国の人口はどのくらい知っているか」なんて聞く。

「忘れちゃったな、3億かい」と言うと、

「おやじ、何にも知っちゃあいないな、どうして忘れちゃうんだ。先生が覚えておけと言ったよ」

「そんなことを覚えておけば頭が破裂しちゃうから、書いたらすぐ忘れることにしているんだ」

「覚えておかないでどうして本が書けるんだ」

「そんなものは年鑑だろうが、字引だろうが、資料をたくさん並べて置いて書けばいいんだ。お前、中

国の人口が今7億だなんて覚えても、10年たったら8億になっているかもしれないんだぞ。そんなことを覚えていたって役に立たない。いま中国では農業が盛んだといっても、10年たてば工業が盛んになるかもしれないじゃないか。ただおまえが中国のことを書いてくれと言え、どんなことを書けばいいか、おとうさんの頭にはちゃんと浮かぶよ。そしてそのために必要な資料を持ってくるよ」と言ったことがある。そのむすこはもう大学へ行っていて、「おやじがあんなことを言うから不勉強になっちゃった」と冗談を言う。わたしはそのように非教育的な親であるが、今でもそのことはまちがっていないと思っている。

詰め込み教育100年の結果は？

知識というのは、教科書の著者が現実を見て整理をし、その結果を知識として教科書にまとめたものである。そんなものを与えても子どもの能力は伸びない。「詰め込み教育」とか「知識を与える」ということばがあり、知識は、時計でも与えるように与えるものだと考えて、何の気なしにそういうことばを使っているが、ほんとうに知識は与えたり詰め込んだりすることが出来るものだろうか。そういうことばの中に、「知識」に対する今までの考え方がある。

人間を、知識を盛り込むコップのように考えて100年間たった。その結果われわれはどれだけこうになり賢明になったか。現代の社会は、そういう疑問を起こさせる非常に多くのものを皆さんの前に提供している。

たとえば公害はどうだろうか。われわれの生活の周囲はだんだんおかしくなっている。身体に影響するものが出てきたり、海がよごれて魚がとれなくなってきた。そういうことを自分の目ではっきり

見つめて、「これはおかしいぞ」と考えることの出来る人間が育っていただろうか。もしそうだとすれば、イタイタイ病にしても水俣病にしても、もっと早く処理されていたはずである。ところが実際には“偉い人がやっていることだからまちがいない”と見ていたんじゃないだろうか。自分のまわりがどう変わってきているか、するどい眼を使って情報をつかみ、“これはおかしいぞ”と考える人間が育ってこないんじゃないだろうか。くすりについても何についても、いたずらにあやしげな情報に支配され、あるいはすっかり信用して、ありがたがってちようだいしているうちに、からだが変わってきてしまう。どこかおかしいところがあるとお考えにならないだろうか。実は、知識を与えればよい、教科書は正しい、それさえおぼえておけばよい、という考え方で人間を教育してきたからだと思ふ。

何も教育がすべての責任をとらなければならないことはないが、教育の側から考えれば、学校の教師も、親も、私も含めて、そのことをもう一ぺん考え直したり、ざんげをしたりしなければならない問題だと思ふ。

私は教科書にうそがあるとは言わないが、真実は時代とともに変わっていくから、そこで教えるものだけが大事なものではない。情報の根源から、正しい情報をとり出すことの出来る人間を作らなければならない。現実に目を向けて、そこから正しいものは何であるかを引き出すことの出来る人間を作らなければならない。

そういうことを、今までわれわれはどれだけやってきたか。もちろん全然やらなかったとは言わないが、そういう考え方で教育をしようとする努力は微々たるものであった。自然のことにしても社会のことにしても、教科書に書いてある結果だけを示し

て、「覚えておきなさい」という教育の仕方をして、人間が自分で働きかけ、そこから学びとり、子どもを行動させようということをしない。教科書で教えたほうがよくわかるし、早いじゃないかとお考えになるかもしれないが、それだけでは、子どもがまわりのものに対して神経を働かせ、そこから何かを学ぶという姿勢は育たない。

皆さんは“やってみなくては”ということばをお使いになるだろう。ここには農家の方もおられるようだが、農業なども教科書で教えられたものではなく、親といっしょに田畑に出て、植物の育つ姿を自分の目で見て分析し、いまどういふ肥料をやらなければいけないかなどを知ってきた。自分の感情を自然のダイナミックな関係の中でとらえてきたものだから尊い。自然だろうが、社会だろうが、まわりのものに対してもっとするどい目を使って、自分はそこで何をなすべきかを読み取り、行動するような人間が作られなければ、われわれの社会はほんとうによくなっていかないだろう。知識を与えて、それを知っていることがその人間のためになるのだと考えて、教育を作り上げてきた結果は、いったいどういふことになったか。

口先だけでは世の中は変わらない

私はある用事で東京大学へ行ったら、教授が学生と団交をやっているという。どういう団交かというと、大学院の修士課程を卒業する学生を全部無試験でドクターコースに入れろという。そんなに入れる定員はない。ゆきたいならば全部入れたらよいじゃないかという議論も成り立つが、大学はさまざまな条件、経費から割り出して、現在そういう体制をとっていない。それをすぐ無試験で入れろと言え通るという考え方で団交をしているとしたら、こっけ

いな話だ。

ちょっとしたことを切り換えようとしても、それまでにはたいへんな努力で下から積み上げてきたものがあるのだから、世の中はそんなに簡単には動かないというセンスさえ持っていない大学生では困る。何かというとゲバ棒をふるう大学生がたくさんいるが、戦後、「ああ、よく知っている、たいへんけっこうです」とやっているうちに、実際に現実に働きかけ、そこから何かを考え、その現実を切り換えていく努力をするということがいかにたいせつかということを、全然教育されなかった子どもたちが育ってきてそういうことをやっているんじゃないかと、私は感じる。“ただ口先だけで世の中は変わる、変わらなかったら暴力だ”という結果を生み出しているのは、教育に何か問題があるのではないか。

ざっくばらんな話だが、私は学校の先生方の研修会などにおつきあいして合宿することがある。そんなとき、先生方が使っているトイレに行ってみて、スリッパがすぐ使えるようにむこう向きに並んでいるということにはめったにお目にかからない。そこへいくと産業界の学校のほうが立派だ。大阪の松下電器の松下工学院なんかは、いつ行ってみてもスリッパがきちんと並んでいる。日立の研修所も、部長以上の人が研修するところだが、それを非常にやかましく言っている。スリッパは出るときにむこうに向けて出てくるのが一番合理的なんだが、実際にはなかなかやらないし、どなたもそれで平気である。

私はうちの子どもには小さいときから、「出るときはむこう向きにぬぎなさい」とやかましく教えてきた。子どもはあわててはいつてサッと出てくるので、すぐ忘れてしまうんだが、やかましく言っているうち、小学校5、6年ころには、むこう向きに出てくるようになった。お客さんなどが来ると、「おやじの

きょうのお客さんは社会性がないぞ。はいるときにスリッパがむこう向きになっていたのをあの人はわからないのかなあ」などと言う。私は、「その人の目に情報を見とる目がないんだ。自分が行動する場面で、どうなっているか、自分が何をしたいか、どうすればよいか見えないような怪しげな情報処理能力では、これからの世の中は生きていけないぞ」とよく言う。そういうふうな自分の身のまわりのことで、どこで、どうするかという情報をつかみ取ることを、もう少しお考えになったら、子どもの教育というものにも、まだいろいろなところに問題がある。

正しいことを自分で見つける能力を

テレビでの教育もけっこうだが、もっと身近なところで子どもと対決する場面が、おかあさん方にはたくさんあるということを申し上げたい。ただ知識として教えるのではなくて、生活の中で、どこで、どういう知識を使って、何をしなければならぬかということ、いくらでも教えなければならぬことがある。

対話なんていうものは、話をすることばかりではない。神経を使って火花を散らすことである。自分がいま何をすればいいかという神経を働かすことが出来る子どもを育てているかどうかをお考えいただきたい。おかあさんがいっしょうけんめい仕事をしているのに、ただポカンと見ているような子どもでいいかどうか。そういうところで親子の話し合いをしましょうなんていうのは、おかしくはないか。テレビの前にかしこまって、「きょうのテレビの〈男は度胸〉は八代将軍吉宗のときのことで」などと、字引きを引いて教えてみてもどうにもならない。

私もせがれといっしょにテレビを見るが、子どもは「こんどはこうなるよ。ほらそうなった。だから

この作者はだめなんだ」なんて、子どもも大きくなると、いま作者は何を語ろうとしているか、自分だったらどうするかといったことを考えながら見るようになる。それは、ただ与えられた情報を受け取るだけのものではない。

今まで長い間、ひとが作った情報を受け取るということをやってきた。日本ばかりではなく、世界中どここの国も、近世になるまではそうであった。日本も100年ばかり前までは「子曰く」とやっていた。それは孔子の作った情報である。孔子は自分の生活の中で現実を分析し、学問とはどういうものか、われわれが真実をきわめるといことはどういうことか、先生から話を聞いても、それを自分で繰り返し分析して、こうすればたのしい人生を築くことが出来るという事実を作りあげていった、りっぱな情報生産者である。

孔子にしても、釈迦にしても、キリストにしても、りっぱな情報生産者であり、社会一般があまり発達していなかった段階では、そうしたすぐれた情報生産者のことばを繰り返し反すうするという形で、人間の教育が行なわれてきた。ところが、そういうことだけではだめなんだぞということを、ヨーロッパで近世になってから言い出した。それが一つの宗教改革で、ただことばだけではだめで、キリストのその根源にかえって物事を考え直さなければならないんだと言い出した。そして、ことばにとらわれていると墮落する、真実にもっともどらなければならないということになった。

現代のわれわれが、自然科学で信じていると言うか、くらしの知識として知っている地動説という学説がある。地球が太陽のまわりをまわっているということはまちがいなさそうだ。地球の外へ飛び出して月へ行くことが出来たということで、正しかった

ことが実証できた。しかし中世にあっては、「何が何でも地球が動いているんで、太陽が動いているのではない」と言ったために殺された人がいる。そのガリレオ・ガリレイ^註は、われわれの環境の中から真実を取り出してきた人であり、そういう少数の天才の考えたものによって、われわれの生活は作られてきている。

今の社会は、もっと皆の人が、われわれを取り巻く環境から、正しいことは何かということを見ることが出来る能力を持たなければいけない。それには子どものころから現実にもまわって、自分のまわりに何があるか、自分は何ををなすべきかに、たえず神経が働くよう訓練されるような場に、子どもが置かれなければならない。それを、もし今のおとなのように、ただ「本を読みなさい」「よく覚えなさい」というふうにすれば、子どもの能力は衰えていってしまう。子どもはもったきびしい現実の中に入れて込んで鍛えなければだめだ。

昔から“総領の甚六”ということばがある。私も総領だが、初めての子は親も珍しく、チャホヤする。だから箱入りむすこや箱入りむすめになって、じっとしていても世の中は自分を中心に動いているように思ってしまう。ところが2番目、3番目になると親も珍しくないから放って置く。そこでぼんやりしていればお菓子なんか上の者にとられてしまうから神経を使い知恵が出てきてするどくなる。同じ環境にあってさえそうだ。親が「けんかしちゃだめだ」なんて言ってみたってだめだ。その知恵をよりよく育てるのがおかあさんの仕事である。子どもをそういう場面におくことによって子どもの能力が育つのであって、「けんかをしてはだめだ、妹をかわいがりなさい」と言うのは育てることにならない。どうして妹をかわいがらなければいけないのかということ

を、子どもが察するような場に置いてやればよい。たとえば妹がおぼれそうになれば、兄は助けるだろうし、助かれば“ああよかった”と思うだろう。知識で子どもが育つと思っていると大まちがいである。

もっと生活の行動の中に、生き生きとした反応を持つ子どもが育つようにすることである。今のおとなは反対に、子どもの視野をだんだん狭くし、外に飛び出して自ら働こうとしないような人間に育てているのではないだろうか。明治以来の教育がそういう人間を作り、口先だけは達者だが、実際には裏腹な事をしているという事実は、今の国会を見ればすぐわかる。あれが日本の代表的な人物なんだから、そういうことで世の中がうまくいくかどうかを考えていただきたい。

“わかるから出来る”のか

“出来るからわかる”のか

そういう口先だけの人間が、どうして育ってきてしまったのかというと、私は知識に対する迷信だと思う。こういうことを申し上げると、皆さんは「何かを知らなければ出来ないじゃないか」とおっしゃるだろう。しかし知らせたって出来ない。できるような習性を作るようにしてやらなければならない。

私はサーカスが好きでよく見るが、世界のサーカスはたいへん進歩して、人間と同じようなことを動物にやらせる。それは脳科学を土台にして動物を育てるからだ、その基本的な考えは人間にもそっくり当てはまる。やらなければ出来るようにならない。出来るようになって初めて、ほんとうの意味で“よかった”ということになる。わかるから出来るのではなくて、出来るからわかるんだと、逆に考えてみるということも、きっとこれからお役にたつと思う。

きょうは、テレビを使って親子でいっしょに見て、

いろいろ勉強するというのをディスカッションしておられるが、教科書のようにただそれを受け取るだけのテレビの見方であるならば私は賛成できない。

どうもわれわれは、社会的なものから与えられるものはありがたがってちょうだいするくせがあるが、そういう目でごらんになるのではなく、そういう情報が提供されたら、それは誰かが何かを見て解釈して情報としたものであるから、その背後にある事実をもう一ぺんさぐってみるという態度でごらんなったらよい。その情報は皆さんのまわりにいくらかあることだから、そのとらえ方が正しいかどうかは、皆さんが自分でも現実を見つめていなければ、出された情報の価値は判断できない。

“りっぱな人が作ったんだから本当だろう”ではなく、情報の根源にある現実、自分たちのまわりにある現実を見つめることが必要であり、だからこそみんなが集まってテレビを土台にして話し合うことも必要なのだろう。それが出来る人だったら、何も皆で集まって話し合うことも必要ではないし、個人で見てもさしつかえない。テレビを見るのが大事なのではなくて、テレビを見ることをきっかけとして現実にせまっていくことが大事なのだということを考えていただきたい。

もっと違った形で言うと、たとえばドラマを子どもが見ていて、“いいやつをだれかがいじめている、ああいけない”と思うとき、それは子どもがテレビに参加していることで、参加してはじめて子どもは伸びていく。流行歌なども子どもは参加するからおぼえていくので、この間も町を歩いていたら、三つぐらいの子どもが、“この際、かあちゃんと別れよう”なんて歌っていた。やっぱりおもしろいから子どもは参加し、おぼえていく。

子どもというものは、いろんなところで自分の能

力を伸ばしている。音楽に対するセンスだって、流行歌をちゃんと歌うことから伸ばしていかせようし、世の中の悪に対する感覚もその中で見つけていくかもしれない。むしろ、子どもが何を喜び、どうなっていくかをじっとごらんになることによって、子どもがそこでどういう能力を伸ばしていくかということもお気づきになるだろう。そういうことから子どもをどう育てたらよいかを感じることも出来るはずだ。

ただ知識や、単なる道徳的教訓の側からだけではお考えになって、子どもを狭い視野にとじ込めるようなことのないように。テレビにしても、子どもがテレビに参加することによって伸びていくのだということをお考えになって、そういう態度でもう一度子どもをごらんになっていただきたい。

(文責・編集者)

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

講師の矢口新氏は茨城県出身。東大教育学科卒業後、長年教育研究所にあって、各種教育関係の調査・研究や教科書の編集、教材映画の製作などをされてきましたが、その間にユネスコ国際会議に出席されたり、東南アジアの諸国を歴訪されています。

昭和40年に国立教育研究所を退職され、日本生産性本部プログラム教育研究所長に就任され、43年に財団法人能力開発工学センターを設立されました。

著書に「カリキュラムと視覚教育」「農村における青年教育」「社会科既論」「プログラム学習の原理と方法」などがあります

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

〈編集部注〉

ガリレオ・ガリレイが死刑にはなったというのは通説。実際には、コペルニクスの唱えた地動説を指示したため、異端審問で追及され職を失い、軟禁状態での晩年を送ったという。